

理学療法や作業療法では、「評価に始まり評価に終わる」とよく耳にするが、この評価結果を数値化し、蓄積できていないことが、科学的データに基づくエビデンスを示しにくくしている大きな原因である。医学会では、過去のカルテの血液データや画像データなどを後方視的に分析し、ある治療効果の有無や予後を検討しているような研究も多いが、理学療法や作業療法分野ではほとんどない。エビデンスの確立や正確な予後予測のためには、国際的に共有できる、信頼性や妥当性の高い機能評価を日々の臨床の中で行っていくことが不可欠である。

理学療法や作業療法評価におけるゴール設定の重要性は誰もが認めるところであるが、理学療法士や作業療法士は何を根拠にゴール設定をしているのだろうか？ 自分が評価した結果から患者のゴールを導き出すためには、必ず予後予測を行う必要があるが、多くの場合は過去の経験からのみゴールを設定し、そのゴールが正しかったかどうか（治療が正しかったかどうか）の吟味さえされない。これでは理学療法や作業療法の発展など考えられない。

上記の問題を解決してくれる良書として、道免和久教授編集の『脳卒中機能評価・予後予測マニュアル』が発刊された。本書の第Ⅰ部では、「予後予測のための脳卒中機能評価」として ADL 評価、総合評価、高次脳機能の評価、感覚・運動・反射の評価、上肢機能の評価、下肢・体幹・歩行の評価等が詳細に解説されている。第Ⅱ部では、「脳卒中機能予後

予測」として、従来の予後予測法、合併症の予後予測、最新の予後予測法、FIM を用いた予後予測法などが紹介されている。さらに、第Ⅲ部において予後予測の実践事例が 7 例紹介されている。まず、この実践事例から読み始めると予後予測を具体的に理解しやすいかもしれない。この第Ⅲ部では、急性期の運動麻痺が重度な脳卒中例の上肢機能の予後予測や、脳出血や脳梗塞例の歩行と ADL の予後予測が症例情報とともに具体的に記載されていて、非常にわかりやすい。最後に第Ⅳ部として Motor Activity Log (MAL) と Wolf Motor Function Test (WMFT) の評価マニュアルも記載されている。

マニュアルという名の通り本書を手引き書としながら、予後予測法を実践できるようになっている。ただし編者は、本書の最終的な目的は「よく当たる予測法」をマスターすることではないと述べている。予後予測することで、予後予測が外れた理由をあらゆる角度から深く考察することのほうが、予後予測が的中することよりも重要であると指摘している。

本書は、兵庫医科大学リハビリテーション医学教室が主催する「脳卒中機能評価・予後予測セミナー」のテキストの内容をもとに編集・執筆されたものである。本書を手引き書に臨床での評価に活用し、さらに深い知識を得たい場合には、セミナーへの参加をお勧めする。

(B5 頁 288 2013 年 定価 4,725 円 (本体 4,500 円 + 税 5%)) [SBN978-4-260-01759-6] 医学書院刊)